

経済為替ニュース

SUMITOMO MITSUI TRUST BANK, LIMITED FX NEWS

第2118号

2012年06月18日（月曜日）

《 slim victory for Pro-Europe Party 》

5月の初めの総選挙から一ヶ月と10日余り。その間の時に激しい選挙運動にも関わらず、ギリシャの人々は殆ど考え方の割合を変えなかったことが分かった再選挙でした。上位二党に票が集まる傾向が強まりはしましたが、各党が得た票の割合は、5月初めのそれと殆ど変わらなかった。ドイツのお節介な新聞の社説も、テレビの生番組でのある出席者による女性殴打も、結果的にあまり関係なかった。

勝ったのは前回と同じ“緊縮派”と呼ばれる新民主主義党（得票率は約30%）であり、それから僅かに3ポイントほど少ない得票率（27%前後）で急進左派連合が2位になった。新民主主義党のサマラス党首は勝利を宣言し、急進左派連合のリーダーであるツィプラス氏は敗北を認めた。しかしそれにしても国論の二分状態は続いている。国民の依然としてかなりの割合の人が、急進左派連合を支持した事実は重い。

5月初めの選挙と違うのは、今回の場合は勝利政党に50のボーナス議席が与えられること。この結果まだ最終的には確定しないが、新民主主義党の議席は127～128議席に達する可能性がある。しかしこれは全300議席の議会での過半数は単独ではとれない。今回の一連の選挙の前に同党が連立を組んでいた全ギリシャ社会主義運動が30議席ほど議席を確保する見通しであり、もしこの2党の合意ができれば、いわゆる“緊縮派”と呼ばれる連立政権が出来上がることになる。多分そうなるだろう。これは今の金融市場にとっては、「当面の懸念の後退」ということになる。

しかし“緊縮派”と言っても、新民主主義党は急進左派連合の勢いに押されて「ギリシャがEUから受け入れた緊縮策に関して、修正を求める」と選挙戦で国民に約束してしまっている。対してドイツのメルケル首相は「修正は基本的には認めない」という立場だ。マーケットとしても手放しでは安心できない状況である。勝利した政党は“修正”を約束した。ということはギリシャの新政権が“緊縮策”の中味を交渉で変えることに成功しなければ（これはかなり難しいが）、国内の政情は悪化する危険性が高い。急進左派連合は連立への参加を拒否する見込みである。

ギリシャが当面抱えている問題も大きい。今回の再選挙という時間がかかる手続きの中で、EUに約束した当面の緊縮策（115億ユーロ相当）が既に遅れている。この遅れについてはEUが大目に見る可能性がある。しかし、ギリシャにとって待ったなしの状況は続く。ボーナスの50議席を得ても過半数がとれないという状況の中で、新民主主義党の「統治の

正統性」に対する疑念も強い。一つの可能性としては、再び連立交渉に時間がかかりそうななかで、「政治家ではないテクノクラートに政治を当面任せる」という案も浮上してくる可能性がある。

しかしそれでは「なぜ再選挙をしたのか」という議論が出てくる。いずれにせよ、ギリシャを取り巻く状況が依然として難しいことに変わりはない。

《 but growth is not assured 》

そもそも、ギリシャが抱える根本的な問題は、

「産業力の欠如」

「国民一人一人の生産性の低さ」

である。EU という域内での最適生産地を求めるシステムがそれを加速した事実も指摘できる。ギリシャの人達が言うので間違いない。「産業がみんな流出してしまった」と。実際の所、ギリシャには観光以外に「これ」と言った産業が今はない。その観光はギリシャにとって大きい。アテネのタクシーの運転手さんが言うのです。「ギリシャというのは、ホテルや土産物屋などで職があって働いていさえすれば、ちゃんと家が持てる国なんだ」と。土地、家を含めてモノの値段が安いからです。

ところがその「職」に付いている人は、働ける国民10人の中で8人いない。若者は10人に5人が職に就けないでいる。今の危機の中でギリシャには観光客がかつてほどは来なくなつた。かつ、今は最大の輸出産業の一つになっているオリーブ油輸出が、特に南ヨーロッパの経済危機で不振だ。「南欧版オイル危機」と言う人も居る。

「ユーロ圏残留をかけて再選挙」とか言う見出しを日本の新聞で見かけたが、ちょっと違う。なぜなら、緊縮派も反緊縮派も「ユーロ残留」という一点では全く意見を異にしない。では問題は何か。反緊縮だと政治的に直ちにユーロ残留が難しくなる可能性が高かつたということだ。何せ左翼急進連合を率いるツィプラス氏（37才）は、「公務員を10万人増やす」「緊縮策以来減った年金や給与を元に戻す」と言っていた。これはギリシャに約束の履行（全部でなくても大部分の）を迫る他の欧州諸国は絶対飲めないし、ギリシャ国民も「そんなことはできない」と新民主主義党を勝たせたとも言える。

危機の始まる前に政権の座に付いていた緊縮派（ND とか全ギリシャ社会主義運動）も実は、「約束通り緊縮策を実施する」とは必ずしも言っていない。既に述べたとおりで、“修正”を国民に約束した。今のギリシャで厳しい緊縮策を実施し続ければ経済がもっとシュリンクすることは明確だからだ。結局「緊縮策の中味を”成長”を加味してEUと再交渉」ということになる。恐らくEUもこれは飲まざるを得ないが、厳しい交渉になる。

実はギリシャ危機の問題の本質、つまり「産業力の欠如」「国民一人一人の生産性の低さ」という問題は、政治的妥協とか合意の中では解決しない。かつ方向転換するには非常に時間

がかかる。どちらが勝つか、という問題とは全く別である。ギリシャでは当然だが税収が落ち込み続けている。行くと分かるが、「富」はある。多くの人が良いレストランで食事をしている。

しかし徴税システムが不備だし、国民に納税に関する義務意識が薄い。よって、既にギリシャの国庫はカラに近い状態だと言われる。カラになったら、ギリシャ政府が発行する債券がEUなどによって保証されない限り（そしたら売れる）、またEUなどから新たな資金借入れをしない限り、ギリシャ政府は国家公務員の給与さえ払えなくなる。

もしそこまで考えるならば、17日の再総選挙で「緊縮派」が勝った」という事は、実は「表面的なことである」とも言える。（マーケットの）knee-jerk reactionもそれほど大きくないのは、市場がそれを見限っていたのだろ。

市場は今後もギリシャに加えてスペインの銀行問題などに関心を示すでしょう。

今週の主な予定は以下の通り。

6月17日（日）	ギリシャ再選挙 フランス国民議会選挙
6月18日（月）	6月金融経済月報 全国百貨店売上高 6月月例経済報告 G20サミット（19日まで・メキシコ） インド金融政策委員会 米6月NAHB住宅価格指数
6月19日（火）	米5月住宅着工件数
6月20日（水）	5月貿易統計 日銀金融政策決定会合議事要旨（5月開催分） 4月全産業活動指数 5月コンビニエンスストア売上高 米FOMC バーナンキ米FRB議長記者会見
6月21日（木）	ユーロ圏財務相会合 スペイン国債入札 米新規失業保険申請件数 米6月フィラデルフィア連銀製造業景気指数 米5月中古住宅販売件数 米4月FHFA住宅価格指数
6月22日（金）	5月チェーンストア売上高 EU財務相理事会

休場／中国（端午節）

G20 はギリシャの選挙結果を歓迎する一方で、ヨーロッパが今後もシステムの安定に敏速に対応するよう求めるでしょう。G7 と同じで G20 が今できる事はない。そういう意味では、各国の中央銀行の対処が注目を集めるでしょう。

《 have a nice week 》

週末はいかがでしたか。梅雨入りであり、台風も来ている。ま毎年のこととはいえ、あまりパットしない気分の日々かも知れませんが、「夏風邪」というか「夏喉風邪」がはやってるらしい。お気を付けて。

ところで先週もいろいろありましたね。オウム真理教関連で特別指名手配されていた人物の中で最後まで逃げていた高橋克也容疑者の逮捕もいろいろ考えさせられることでした。17年間も逃げられたという側面と、世間の注目を浴びたら一般の人の目から逃れることは出来なかった、という側面と。

やはり17年というのは重いですね。しかも首都圏をずっと離れなかったという事実。大阪に逃げ込むとか、海外に行くと言うこともなく、ずっと日本最大の都市圏である東京のマージナルな場所に潜んでいた。埼玉、神奈川、そして東京の南の蒲田。面相が大きく変わったという意味では、あの街々に張ってあった写真が邪魔したのかも知れない。菊池容疑者のお顔はパンパンだった。当然体もそうかと思う。しかし捕まった本人は、想像も付かない超やせ形。腰の肉なんかそげ落ちていた。顔もパンパンの状態から風船が萎んだ状態。

高橋も、眉毛が濃いのが特徴だったが、加齢か措置したのか眉毛は細く、薄くなっていた。人間は変われば変わるものだ、と思う一方で、モニタージュ写真とか手配写真はいくつかのケースで出しておくべきだ、という印象がした。菊池容疑者が逮捕されて以降は、「包囲網は狭まっている」という印象であり、「いつかは捕まる」という確信はあった。何よりも、今は「目」が凄い。監視カメラがあちこちにあり、道路には監視システムが埋め込まれている。

しかし一番恐いのは「市民の目」だった。オウム事件に対する人々の関心が再び高まった、特に逃亡犯に対する関心が強くなった（懸賞金もあったのかもしれないが）が故に、誰もが何回も発表された「高橋の顔」を覚え、知らず知らずのうちに「違うだろうか」と時に思うようになった。また、昨日までは本当に「どこにでも警官がいる」と言うのが首都圏の状況だった。しかし配置された警官が彼を見つけることはなかった。

社員寮を出た段階から、高橋が立ち寄れる場所は限られた。ホテル？ これは目が厳しいでしょう。一部にはフロントと顔を合わせなくても入れるホテルがあるが、むしろここはターゲットになる。お金も「直ぐ無くなったら困る」と考えたのだろう。彼が逃げ込んだ、最後に捕まったのは漫画喫茶というのは今後の参考になる。逃亡に熱心だった高橋が考えに考えて、「都市に隠れるならここ」と決めたのが、漫画喫茶やビデオボックス。しかし、今

回はそこの店長に「あれ、似てる」と思われてしまった。

逃亡犯が次々に捕まった。一緒に逃げていた仲間が次々に捕まっている、という事実が彼等の逃亡意欲を削いだ面もある。しかし、一方で「目が山ほどある世の中」において、本当にそこにいながら自分を消すことが難しくなったことが今回分かった。

それでは皆さんには良い一週間を。

《当「ニュース」は三井住友トラスト基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail ycaster@gol.com)の相場見解を記したものであり、三井住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したのですが、正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》